

中谷哲弥 著

『インド・パキスタン分離独立と難民—移動と再定住の民族誌』

2019年、明石書店、503ページ、6800円+税、ISBN 978-4-7503-4835-3

小松原 尚

大著である。本書は「まえがき」にも記されているように、1947年に英領インドからインドとパキスタンの分離独立によって発生した難民（避難民）の問題を取り扱っている(3)。

本書を「大著」と評したのは、まず第一に、500ページを超えるそのボリュームである。その構成については次に示すが、本書が著者自らによる、1995年4月から2009年3月まで15年に及ぶ長期のフィールドワークの成果を取りまとめたものであるからでもある。しかし、本書が調査報告書の類ではないことは言うまでもない。第2部と第3部では、インドの農村と首都における膨大なヒアリングの成果を入念に吟味し、それぞれの章ごとに小括を設けることで検証結果を明確にし、学術書としての価値を高めている。

「大著」の第二の所以は、著者自身の問題意識に著者自身がその答えをしっかりと示されたものであるということである。本書の「結論」において著者は「本書に通底する大きな問題意識は、南アジアの近代史と現代史の結節点であるインドとパキスタンの独立について、そのもうひとつの側面である『分離』という面から問い直すこと」(463)と記されている。そして、著者が「分離」後の数十年に注目し検証を試み、その成果を広大なインド亜大陸における難民（避難民）の移動と再定住・定着の民族誌としてまとめあげることに成功したことは、門外漢の評者にも想像できるのである。

評者は人文地理学を専攻している。本務校にあつてはその構成分野である経済地理学を講じている。人文地理学においても人の移動に関する研究は活発である。平時における観光客と労働力、そして混乱時における難民の移動に関する論考もみられる。このような斯学における研究動向を踏まえると、本書の様々な研究分野への波及効果も少なくないと考えられる。この点が「大著」の第三の理由であり、これからこの観点から本書の紹介を試みるが、その前に目次構成を示しておく。

書評・紹介

序論

1. 概要
2. 問題の所在—分離研究と難民研究
3. 分離独立難民に関する先行研究
4. 難民の定義
5. 調査について
6. 本書の構成

第1部：インド・パキスタン分離独立と難民問題

第1章 分離独立とヒンドゥー・ムスリム関係

- 第1節 ヒンドゥー・ムスリム関係
- 第2節 分離独立への政治過程
- 第3節 国境画定問題

第2章 分離独立による難民の発生と政策

- 第1節 南アジアにおける難民問題
- 第2節 分離独立による難民の発生と難民移動
- 第3節 難民政策

第2部：農村部での再定住—西ベンガル州のボーダー・エリア

第3章 西ベンガル州・ノディア県における難民の移動と再定住

- 第1節 調査地の概要
- 第2節 難民の属性と移動形態の特徴—世帯調査より

小括

第4章 農村部での難民再定住の諸形態

- 第1節 政府によるリハビリテーション
- 第2節 ムスリムとの財産交換
- 第3節 自力での再定住

小括

第5章 ノモシュードロ：リハビリテーション活動と社会開発

- 第1節 「フォリドブルのガンディー」と呼ばれたソーシャル・ワーカー
- 第2節 「フォリドブルのガンディー」と難民リハビリテーション
- 第3節 難民再定住から社会開発へ

小括

第6章 カースト・アイデンティティと難民の記憶

- 第1節 ノモシュードロの宗教世界—モトウア
- 第2節 移住先での難民社会と宗教祭礼
- 第3節 難民の記憶と相互認識

第3部：大都市圏での再定住—首都デリー

第7章 デリーにおける東パキスタン避難民コロニー獲得運動

第1節 独立後のデリーと東パキスタン避難民

第2節 東パキスタン避難民コロニー獲得運動

小括

第8章 チットロンジョン・パーク：住民の属性と移動形態

第1節 チットロンジョン・パークの概要

第2節 住民の特性—世帯調査より

小括

第9章 生活空間の構築とベンガルをめぐる模索

第1節 ミニ・ベンガルを構築するアソーシエーション的連合

第2節 チットロンジョン・パークを越えて広がるベンガル・ネットワーク

第3節 ミニ・ベンガルの揺らぎと模索

小括

第10章 近隣関係の構築と都市化・再開発

第1節 デリーにおける都市化の進展

第2節 ドゥルガ・ブジャ（ドゥルガ女神年祭礼）の拡大と分裂

第3節 都市開発によるミニ・ベンガルの揺らぎ

小括

結論

以上が目次構成である。

さて、人文地理学における難民研究の動向に関しては、吉田道代によると、「中心テーマは、①難民発生の原因、②難民が避難地域に与える影響、③先進国への再定住における空間パターン」であり、対象期間は1970年代以降のものである（文献①277）。こうした難民に関する地理学的関心状況を踏まえると、20世紀半ばまでのものは少なく、1940年代から50年代を問題関心としている本書は、地理学的にも貴重な存在である。この点に関しては本書の第2章を中心に紹介したい。

また、難民の定住の前提は収入源の確保と安定化にある。そのためには難民の就職行動の実態を知ることが必要となる。千葉立也は、「労働者はたんに労働力という商品の売り手だけでなく、同時に…（中略）…社会的、制度的な側面への目配りは不可欠」（文献①260）と述べている。本書においても生産手段としての農地の確保がままならない状況下の農民に関する詳細な記述がみられ、経済地理学の問題関心との関連性を示唆している。この点に関しては本書の第3章と第4章を中心に紹介したい。

さらに、経済地理学では、第1次産業でも第2次産業でもない、その他の産業の括

書評・紹介

りとしての第3次産業の中で、商業を含むサービス業への関心が高まっている。加藤幸治はこの点に関して「サービスの特性からすれば、生産と消費の場所の時間的・空間的分離は果しえない…(中略)…点が経済地理学の中で強く意識されているとはいえない。したがって、その研究もこれまでのところ大幅に立ち遅れている」(文献②144)。

難民にかかわるサービスの生産と消費との関係について考えるとき、輸送も貯蔵もできないサービス財は、わずかな一般財しか携行できない難民にとっては貴重なものである。モノを置いてきた難民の移動に伴うサービス業の発生を想像でき、その存立形態は本書の「まえがき」からもわかるように著者の問題意識の形成ともかかわることである。詳細を第6章からも読み取ってみたい。

1. 英領インドの独立と難民支援

分離独立によって生じた難民への政府による難民政策の特徴を記した第2章では、「農村部への再定住者のすべてが農業従事者という訳ではない」(70)との説明がなされ、移動の時期は「農村部での土地所有農民、商人、職人など」(72)は1949年ということが記されている。そして、「恒久的な再定住を支援する『リハビリテーション』」の施策では、彼らに「農業や小規模ビジネスのためにローンを与えること」(80)、また、「都市部のリハビリテーションでは、…(中略)…『小商売』、『ビジネス』、『上位ビジネス』、『専門職』の各カテゴリーでローンが供与された」(81)。そして、「『雇用創出』のために…(中略)…企業への優遇措置や、電力や交通公社などの政府系機関への資金援助」(82)もなされたことがわかる。

2. ベンガル難民の生業

第3章では西ベンガル州と東ベンガル(現在のバングラデシュ)の境界領域・農村部における難民の再定住を扱っている。

カースト制と職業の関連性については、「バグディは…(中略)…伝統的職能としては、農業のほか、漁業や雑役」(100)に従事し、この他に、1次産業を職能とするカーストには、マロが池や低湿地での魚取り、マヒッシュョが農業・農業労働(100)にかかわっている。2次産業では「ムチは靴などの皮革加工が主な職能」(100)である。

著者の現地での聞き取りに基づく「『農業関連』『商業関連』『サービス関連』の3つの大きなカテゴリー」(103)に基づく、「農業以外の経済活動も様々なものがみられる。『商業関連』のカテゴリー」(105)もその脈絡の中にある。また、「すべてのカーストが、それぞれのいわゆる伝統的職能に従事している訳ではない」(106)ことも明らかにしている。以上から、「低カーストが…(中略)…農業従事者がおおいも

の、小規模な製造業やサービス業など多様な営み」(135-136)の存在を知り得た。

また、いわゆる難民キャンプの状況については、「運河の建設の賃労働」(129)に従事したという聞き取り結果や「キャンプでは…(中略)…自立につながらないという意見」(131)、さらには「キャンプへは行かずに、農業労働や道路工事から始めて…(中略)…自営農業と、自前の倉庫を構えてジュートの仲買業を営む」(131)ということから、キャンプは難民にとっては必ずしもポジティブな存在とは評価され難いものであったことがわかる。

3. 難民の土地取得と再定住

第4章では農村部における土地所有とそれへの対応形態の差異が難民再定住に及ぼした影響に関して論じている。

その中で注目したいのは、「土地のみが難民の再定住において決定的な要因であった訳ではない」(139)という指摘である。そして、「人々の職業は農業以外にも、商業やサービス業など、多岐に渡っている」(139)ことへの関心である。例えば、「土地無しであっても、教員や公務員などの給与所得者もい」(139)るし、「土地を持ちながらもそれ以上の利益をビジネスであげている者」(139)の存在も等閑に付すことはできない。

もちろん「キャンプに収容されていた難民の60%は農民」(140)であり、かれらに生産手段としての土地の確保は政府にとっても主要課題となることはいうまでもない。

次に土地利用と用地確保の方法について本書の記述から見てみよう。「経営面積が大きいのは魚の養殖のために別途取得した土地の方であり、生計はむしろこちらが柱となっていて、受給地での農業は副業」(154)であることや、「比較的良好な経営規模を維持している世帯は…(中略)…それぞれ独自に土地を購入している」(154)こともわかる。さらに「自農と農業労働」(154)を続けた農家では、「路上での野菜販売や農業労働を続けながら土地を買い増している」(154)し、「農業労働とともに、数年間は公務員として働くなかで、土地を増やした」(154)ケースもある。

公的な支援に頼らず、自力で再定住を実現した難民の場合には、「生業として農業を選択する際には農地が必要」(175)としつつも、「現在の農村部では農業以外の生業の重要性」(175)を指摘している。このことは「東パキスタン出身者のサンプル188世帯のうち、農業関連は過半数を超える107世帯(56.9%)」(175)を占めるものの、「商業関連の38世帯(20.2%)とサービス関連の43世帯(22.9%)」(175)の数字も看過できない。

このことを踏まえて、「自力で再定住した人々が、どのようなプロセスを経て現在に至っているのか検討」(176)している。

4. 再定住者の職業

そこで著者は、『農業関連』、『商業関連』、『サービス関連』のカテゴリーごとに個々の事例(176)にあたっている。

まず、農業関連の場合、「自前の農地を所有して農業をおこなう『自農』(176)、「自前の耕作農地だけでは不足しているので農業労働や小作もおこなう『自農・農業労働』や『自農・小作』(176)、「余裕があってビジネスもおこなう『自農・ビジネス経営』(176)の類型を抽出している。

「自農」の場合には、「日雇い労働をしながら買い増し」(176)たケース、「自身は自農のみに従事していたが、息子達は小作も」(177)行っていたケース、「日雇い農業労働や小作を続けながら、徐々に農地を購入し、合わせて灌漑用の施設も設置して通年農業を可能」(177)にしたケースである。

次に「自農・農業労働」や「自農・小作」では、「自前の土地での農業に加えて、…(中略)…他者の土地で農業労働をしたり、小作をしたりしている。出稼ぎをしている世帯も珍しくない」(177)のである。さらに、資本装備の乏しい農家は「揚水機などの投資はなく、子ども達は日雇い労働や村外への出稼ぎに従事」(177)している。また、「穀物をコルカタ方面へ売りに行ったり、村で売り歩いたり、村の定期市の露店で売ったり…(中略)…日雇い労働」(178)、「息子のひとは自分達の土地での農業と日雇い労働をしていて、もう一人は大工の見習いをしたり、建設現場への出稼ぎ」(178)、「日雇い農業労働や果樹園を借りての果樹生産」(178)つまり、「土地所有面積が充分でない場合には、日雇い労働や小作も合わせて…(中略)…作物は米に限らず、ジュートや…(中略)…パパイヤやバナナなどの果樹」(179)栽培もみられることがわかる。

さらに、『農業労働』にもっぱら従事している人々も…(中略)…ほとんどの世帯は全く自前の農地を所有していない。…(中略)…世代を通じて農業労働を続けている」(179)のである。「もっぱら農業労働に従事しながらも、副業に力を入れて徐々にそのウェイトを高め、息子の世代には若干の職の多様化」(180)を進める様子が見られる。

例えば、一つの農家のケースでは、「農業労働のみをやってきました。それとともに、ビリー煙草を巻く仕事で…(中略)…はじめは自分で作業をして仲買人に納めるだけでしたが、今では次男が自分で販売も手がけるようになりました。長男は穀物を路上で売っていて、三男はトラクターのドライバー」(180)というように。

5. 再定住者の職業の多様化

「自農・ビジネス経営」の場合は、「ビジネスの規模は大きく、自農で上がるのと同等以上の収益」(180)を上げるケースもある。また、「ここでのビジネスとは、自

前の倉庫を持つてのジュートや穀物の仲買や卸業、肥料店、大規模に魚の養殖をおこなっているケースなど」(180) 多彩である。

さらに、「次のケースは、そのなかでも最もビジネス規模が大きい部類に入る…(中略)…自農から各種ビジネスへ」(180) と展開している。そして、「自分の土地での農業に加えて、穀類の仲買…(中略)…倉庫もあり…(中略)…村に映画館を開業…(中略)…長男は修士の学位を取得して法律家…(中略)…次男も修士…(中略)…カレッジで臨時の教師」(181) と家族内の職の多様化が進展している。

また、「バス3台購入して、コルカタ方面への路線バスとして走らせ、さらにビジネスを拡大」(181) したり、「ジュートの商売を始め、委任証書によって広大な土地を入手して資本を蓄積」(181)、「農業も含めて複数の商売を経験し同時に展開するなどの多角化」(181)、「製粉所から始めて、食品雑貨店、建材販売店と業種を変えながらビジネス」(181註)に発展、「ピリー煙草販売に加えて家具製造」(181註)も手懸けるケースもある。また、「食品雑貨店を2年間やった後に肥料店を開業し、現在は加えて搾油工場を経営」(181註)するケースも。

農業からビジネスへの展開は、「農地…(中略)…人を使ってやって…(中略)…マンゴーやジャックフルーツの果樹園…(中略)…池も3つ…(中略)…ビジネスとしては、まずジュートの仲買…(中略)…種苗ビジネスを始め…(中略)…長男が定期市の時に露店で種苗を売…(中略)…肥料店もやった」(181-182) というように、農業を足がかりに関連産業へと拡大していることがわかる。

次のケースもその系譜である。すなわち、「ジュートの仲買、種苗ビジネス、肥料店と、ビジネスを展開してきた。…(中略)…農地、果樹園、池(魚の養殖)を所有して多角的な収入源を確保」(182) している。

この地にあっても「所得レベルと教育レベルとはかなり相関」(182) するとの認識から再定住難民らは蓄財にはげむ様子が聞取りからわかる。例えば、「サウジアラビアへ行って働きました。日本の竹中工務店の仕事」(182) にかかわったこと。また、「ジュートのビジネスを始めました。リースですが自前の倉庫を持って、買い付け人を村々に送ってジュートを集め、それを転売して5%のコミッション」(183) を得たこと。さらに「サウジアラビアに出稼ぎに」(183) 行ったことが繰り返し出てくる。

「職人」には「機織り、テーラー、大工、会場設営、製材現場での木材加工、伝統的医師、靴修理、自転車修理などの職業に就いて」(186) いる人々が含まれる。「カーストの伝統的職能と結びついた仕事をしているのは、機織りの」タンティ・カーストと靴(皮革)修理のムチ・カーストである」(186)。「会場設営をしているという世帯は、ブラフモン・カーストである…(中略)…司祭での収入が少ないこともあり、現在の仕事をしている」(186)。

6. 再定住者のサービス業（商業を含む）進出

「小店舗経営」のカテゴリーには「食品雑貨店や食堂、菓子店…（中略）…多角経営的ではなく単一業種・業態で営業」（183）が含まれる。ただし、「ノモシュードロ・カースト世帯が貴金属店を経営し、ボニクカーストの世帯主が機織り職人を経て食品雑貨店を営むなど、カースト要因はあまり関わっていない」（183）こともわかる。

「露天・行商」も「多少の農地を所有する場合には、農業に従事しているケースもあるが、基本的には露天で（特に定期市などの機会に）地面に座って、あるいは道を歩きながらの野菜、果物、穀物、魚などの小売販売が本業…（中略）…所得レベルは、『小店舗経営』よりもさらに低い」（183）状況にある。

「漁業（魚取り/行商）」は、「すべてカーストの伝統的職能者であるマロによって担われている…（中略）…賃金によって投網を用いた魚取り…（中略）…小売をしている者もいる」（186）。彼らは「移住の前も後も漁業に従事」（186）し、「魚取りは指定カーストであるマロの伝統的職能…（中略）…保持率が高く…（中略）…なんとか食べてはいける」（187）状態である。

「サービス関連」世帯には多様な職種が含まれているが、中でも「公務員・会社員・教員」カテゴリーには、初等・中等教育レベルでは（村内）居住者が教員をしているケースもある（184）。これらの世帯では農地を所有していても小作等に出している（184）。これらの世帯の「ほとんどが学業終了後の最初の就職が教員や公務員」（184）である。

この「公務員・会社員・教員」に属する世帯主は、「高等教育を受けた者が多く含まれる。…（中略）…彼らの子ども達も学歴が高い傾向にあり、給与所得者」（184）も存在する。したがって、「高等教育を受けて、教員や公務員を目指す動きは（村内）難民の生存戦略の中に見られるひとつの傾向」（184）となっている。

あるケースでは「現在西ベンガル州政府職員…（中略）…、親族にも公務員が数名いる」（184）事例や、「父親が息子達の教育に力を入れ…（中略）…学士取得で小学校の教師をしており、弟はコルカタで医師」（184）になっている家族もある。そして、「インドでは指定カースト向けに様々な優遇措置がある…（中略）…西ベンガル州の公務員採用も指定カースト枠で合格」（186）すれば採用される。

以上の記述より、「自力再定住においては、職業カテゴリーごとにある程度のカースト要因や教育要因も働きながら、それぞれの再定住と生存のための歩みが展開」（187）されてきたことがわかる。

尚、教育は職業の技術指導に関しても例外ではない。特定カーストの難民たちが難民間の協働関係を形成するなかで実施されたものを第5章にて詳述されている。例えば、孤児院における「仕立て、ガーデニング、野菜・果実栽培などの職業訓練」（230）や職業訓練校における「仕立て、速記とタイプライティング、皮革加工、ラ

ジオ・テレビ修理」(230)、である。これらの訓練の受講者は「指定カースト、指定部族、その他の後進諸階級で90%以上」(231)である。

また、デリー首都圏における再定住を難民(避難民)の集住地区を取り上げての調査と分析を示した第8章では、対象地域「チットロンジョン・パークは、東パキスタンの避難民のために(デリーに)建設されたコロニー」(338)であり、パーク世帯の職業は「110件のサンプルのうち、公務員、専門職、民間被雇用者が96人を占め」(344)ることが記されている。

第9章ではデリー首都圏でのベンガル人の増加と集中について論じている。ベンガル出身者に対する「職業訓練センターを設置し、タイピング、速記、仕立て(裁縫縫い、刺繍など)の職業訓練」(378)の取組みについても紹介している。そして、「デリーへの首都の遷都後に、コルカタからベンガル人の公務員が数多く転勤」(395)による増加に際し、彼ら自らが、自らの福利厚生に協働で取り組んだ状況も述べられている。

7. 高次化するサービス業の脱難民化

ベンガルにおける東西の人の移動に伴い、難民関連サービス業を形成している。尚、ここで評者の設定するサービスの供給次元の高低は第一義的には、当該サービス財の生産と消費が日常的なもの(低次)か非日常的なもの(高次)を示し、技量の巧拙を指すものではない。

著者は「まえがき」において、本書の課題ともなる分離独立難民との出会いを記している。彼らは「行事の主催者により雇われる演奏家達だった。…(中略)…彼らは各人が契約に基づきグループの親方に雇われるプロの集団」であり、「演奏家も行事の主催者も、皆ももとは東ベンガル(東パキスタン)の出身者で…(中略)…訪ねていく先々で東ベンガルの人々に遭遇」(4)するのであった。

第6章では難民間でのカースト間関係を扱っているが、その中で、祭礼の演奏家たちの違いについてふれている。すなわち、マヒッシュョが招いた演奏家達は5～6人で構成されており、「農業、農業労働、穀物・野菜販売、漁業などが本業であり、キルトンの演奏はあくまで副業」(268)にすぎない。そして、「出身地についてみると、…(中略)…地元民(非移住者)」(268)である。

これに対して「ノモシュードロが雇い入れた演奏家達は…(中略)…8～9人で構成…(中略)…多彩な演奏が可能」(268)で、ノモシュードロの演奏家達の「本業は(祭礼における)ナム・キルトンの演奏であり、これによって生計を維持…(中略)…地元民は1名のみであり、残りはすべて東ベンガルからの移住者」(270-271)であることも対照的である。かつての生活の場を離れた人々に対する、往時を偲ぶための空間と歌舞音楽を提供する祭礼という非日常的な、高次なサービス業が難民(避難

書評・紹介

民)によって形成されているのである。

総人口12億余のインド、その首都デリーは現在1千万人弱の人口を擁する都市である。行政機能をはじめとして様々な都市機能の集積を考えるとその存在は国内の他の都市とは別格の存在に思う。第10章ではデリーの都市化の進展をあとづけた後、ヒンドゥー教の年1度の最重要な祭礼であるドゥルガ・プジャの生成から拡大・変質過程を詳述している。

この祭礼にかかわり様々なサービス財の生産と消費が一貫して同じ場所で行われていた。そして、デリーへの諸機能の集積によって、そこでしか得られないサービス財の生産と消費をより高次化していくことになる。この祭礼がコモダリティの洗礼を受けることになったのもその脈絡からと読み取れるのである。そして、新たなベンガルイシューによる都市誌創成の予感を感じずにはいられない。

本書にふれ、ベンガルカレーを鰯腹食ったような読後感をもった。ちなみに食材は淡水魚の鯉とのこと。評者の意識関心による勝手な紹介に対し、著者の寛恕を乞いたい。

文献

- ① 人文地理学会 編 (2013) : 『人文地理学辞典』 丸善出版。
- ② 経済地理学会 編 (2018) : 『キーワードで読む経済地理学』 原書房。

※ 引用・参照箇所には (文献①あるいは②ページ数) と略記する。